

【旧約聖書日課】ハバクク書 3章17～19節

- 17 いちじくの木に花は咲かず
ぶどうの枝は実をつけず
オリーブは収穫の期待を裏切り
田畑は食物を生ぜず
羊はおりから断たれ
牛舎には牛がいなくなる。
- 18 しかし、わたしは主によって喜び
わが救いの神のゆえに踊る。
- 19 わたしの主なる神は、わが力。
わたしの足を雌鹿のようにし
聖なる高台を歩ませられる。
指揮者によって、伴奏付き。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章18～25節

18現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないわたしは思います。19被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。25わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 13章24～43節

24イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。25人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。27僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』28主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、29主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

³¹イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、³²どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」³³また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

³⁴イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。³⁵それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「わたしは口を開いてたとえを用い、
天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

³⁶それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。³⁷イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、³⁸畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。³⁹毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。⁴⁰だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。⁴¹人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、⁴²燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。⁴³そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

「麦も毒麦も育つままに…」【こども説教のために】

わたしたちが日曜日ごとに集められる教会は、「神の家族」です。主イエスが、弟子たちをお集めになられて御言葉をお教えくださり、天の父の御心を行う歩みを共にするようになさったとき、主イエスは弟子たちを「天の父の御心を行うわたしの家族」とお呼びくださいました。主イエスは、どんな者も分け隔てなくお招きくださいますから、教会は、いつでも誰にも扉が開かれているときにこそ、「神の家族」と言うことができるでしょう。

けれども、教会も人の集まりです。世の中で、互いに気の合わない人、価値観の違う人がいるように、教会の中にも、すぐには受け入れるのが難しい人がいるかもしれません。

主イエスは、「毒麦のたとえ」をお語りくださって、わたしたちの間にたとえ「**毒麦**（＝雑草）」があるように見えても、それを抜き取ろうとせずに、**育つままにしておきなさい**、とおっしゃいました。わたしたちには、それが本当は「麦」なのか「毒麦」なのか、良いものなのか悪いものなのか、判断がつかないからです。それを見分けられるのは、ただ神のみです。神が、すべての実りの収穫のときに、良いものを見分けてくださるのです。

天の御父は、良いものの実りを必ず大きく成長させてくださいます。わたしたちは、その御心を信じて、招かれてきた「教会」という畑で、互いが成長し良いものの実りを実らせるときの訪れを待ち続けるのです。

刈り入れのときには…

前任地の教会には付属幼稚園がありましたので、ほぼ連日、園児ばかりでなく教職員や園児保護者と接する機会がありました。その中で、わたし自身、牧師として経営と現場の両方に関わっていましたから、多くの学びを与えられたように思います。ただ、せっかく学んだことも、離れてしまうと徐々に忘れてしまうものです。それでも、自分の中で失われずにいることが、いくらかはあります。特に、ごく短期間一緒に仕事をさせていただいたベテラン園長の口から繰り返し語られていた「子育てや教育で大切なのは、待つことです」という言葉は、わたしの中で変わらず大きな意味を為しています。その言葉は、幼児教育の世界ではありふれたものの一つなのかもしれません。けれども、わたしは、それを、キリスト教会としての価値観、人間観の根幹にかかわるものとして受けとめてきました。

主イエスは、しばしば、「**世の終わりのこと**」をお語りになられました。「毒麦のたとえ」の説明を求められた弟子たちにお教えになられたときも、「**刈り入れは世の終わりのこと**」と説明されました。「マタイ福音書」は殊更に、主イエスが「世の終わりのこと」をお語りになられたことを強調しているようです。そして、そのときには、いわゆる「最後の審判」が為されるだろうということを、判を押したようにお語りになられたというのです。いわく、そのとき裁きによって滅びに定められた者どもは、「**そこで泣きわめいて歯ざりするだろう**」(8:12、13:50、22:13、24:51、25:30も参照)。

けれども、主イエスがそのようなことをお語りになられたとき、それは、もしかすると大真面目にそう宣言されたというのではないのかもしれませんが。実のところ、当時のユダヤ人の間では、同様の「終末の審判」にまつわる、ある種の教訓的な警句は、広く知られていたようなのです。主イエスは、そのようなユダヤ人の中で流布していた「終末」のイメージを、どこか茶化そうとなさっているのかもしれませんが。と言うのも、主イエスは、そのとき「**そこで泣きわめいて歯ざりする**」ことになるのは、「**不法を行う者ども**」や「**悪い者ども**」(13:50)ばかりでなく、「**御国の子ら**」(8:12)かもしれないとも言われているのです。

わたしたちは、教会であろうと、どこであろうと、自分自身が「麦」ではなく「毒麦」であるとは、あまり考えないかもしれませんが。けれども、他人のことは、ときに「毒麦」のように見えてくるのです。たとえの**僕たち**のように、それを引き抜いてしまいたくなるのです。それが良い実を結ぶと思えなければ、待てないのです。けれども、主イエスは、「いや、待て」とおっしゃられる。それは、しかし、刈り入れのときの「滅び」を待て、ということなのでしょう。本心は、違うところにあるのではないのでしょうか。

「耳のある者は《御言葉》聞きなさい」

皆さんは、「毒麦」がどのようなものかご存じでしょうか。「ドクムギ」は、ムギによく似たムギ科の植物のことですが、いろいろな種の含まれた雑草の総称です。家畜が牧草として食すと毒性が働く場合があることから、「ドクムギ」と呼ばれていますが、ムギに毒をもたらすようなものではありません。もちろん、栽培されるムギのような食用になる穀粒を実につけませんから、人間にとっては役立たずの雑草です。畑の栄養を奪い、ムギの成長を阻害する恐れのある邪魔者です。けれども、それは、飽くまで、ムギの収穫を最優先、最大限にしたいと考える人間の都合から見てのことです。ムギは、確かに人間の食物として神から与えられた大きな恵みです。けれども、ドクムギもまた、神がこの世界にお造りになられたものなのではないでしょうか。

主イエスの「毒麦のたとえ」で、とても気になるところがあります。毒麦は、どこから入ってきたのか。「たとえ」は、こう語るのです、「**人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った**」。確かに、毒麦は、「敵」が蒔いて行ったのです。しかも、人が眠っている間に秘かに忍び込んで、蒔いて行ったのです。何たる狡猾な「敵」でしょうか。

けれども、主イエスは、「山上の説教」で、こうお教えだったのではないのでしょうか、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)と。それは、あなたがたが「あなたがたの天の父の子となるためである」(5:45)と。たとえ、その「敵」が「悪人」であろうと、「正しくない者」であろうと、天の父は、その者にも太陽を昇らせ、雨を降らせ、愛されている。だから、あなたがたも、その「敵を愛しなさい」と、主イエスはお教えだったのではないのでしょうか。

そのようなあなたの「敵」が、あなたの知らぬ間に蒔いて行ったという「毒麦」は、果たして、あなたが「毒麦」として取り除いてよいようなものなのか。あなたの「敵」を愛される天の父は、その「敵」が蒔いて行った「毒麦」をも良い実で実らせようとされているのではないか。そもそも、あなたの「敵」にとっては、あなたのほうが「毒麦」に見えているのではないか。そうではないと、あなたは、どうして断言できるのか。だから、あなたは、それが育つままにしておきなさい。天の父がお育てになられ、どのような実りを結ばせるのか、最後まで待ち続け、見届けなさい。

主イエスは、そうお教えなのではないでしょうか。わたしたちは、そこに希望を見いだすのです。わたしも、わたしの敵も、等しく「天の父の御心」を知る「神の子」として成長させていただき、その日には、もはや敵も味方もなく、共に天使らと共に収穫を祝うことになると、希望をもって主の御言葉を聞くのです。「**聞く耳のある者は聞きなさい**」。